「人生100年時代」のライフデザインとは

第一生命経済研究所 代表取締役社長　丸野 孝一

「むかしむかし、ある所に、おじいさんとおばあさんが住んでいました。おじいさんはハローワークに職を探しに、おばあさんは郵便局に年金をもらいに行っています。」100年後の日本昔話はこんな始まりだろうか?

つい最近といっても戦前までは第一次産業で働いていたおじいさんとおばあさんは職探しも年金を受給する必要もなかった。また子供や孫と同居しているので老後生活・介護の不安もなく一生働き続けられた。しかし現代、産業構造は変化し核家族化、少子・高齢化、定年・再雇用などに伴い、家族、就労、介護、家計などあらゆる面で、将来に対する漠然とした不安が生じており、長く生きることを手放しでは喜べない空気がある。

1966年にはわずか252人だった100歳以上の人の数は50年後の2016年には6万5千人を超えている。人生50年といわれた時代の倍の時間を生きる「人生100年時代」が近づきつつある。戦後に形成された「20年学び、40年働き、20年老後を過ごす」という暗黙知のライフデザインも大きく変化する時を迎えている。

一方、書店では「ライフ・シフト100年時代の人生戦略」(リンダ・グラットン、アンドリュー・スコット著)「未来の年表」(河合雅司著)「定年後」(楠木新著)などの対策本がベストセラーとなっている。不老長寿は御伽噺の中では誰もが望む夢であったが、「人生100年時代」が実現しそうな我々にとって未来は希望が持てない、不安だらけの世界になってしまった。漠然とした将来の不安に対し国・企業・家族に頼れない厳しい現実が目の前にある。だからこそ、個人にはどのようなライフデザインが必要なのか、また企業や社会は人々に何を提供でき、どのような環境を整えるべきなのかということについて考えるための情報が必要となっている。

これら対策本の中で東洋経済新報社出版の「ライフ・シフト100年時代の人生戦略」は御伽噺における希望の延長として、人類が初めて手にしたこの永い時間をいままでの価値観に囚われず、どう有意義に活かすかを記載している。具体的には年齢にかかわらず、新たな知識・技能を学び続けること、そして新たな仕事・働き方を模索すること、そしてその前提として健康の維持・増進に努め続けること、総じて永い人生に変化・挑戦し続けることと要約できるだろう。

ところで、第一生命日比谷本社にはマッカーサー執務室が保存されており、元帥が愛唱していたサムエル・ウルマンの「青春」詩のレリーフがある。「青春とは人生の或る期間を言うのではなく心の様相を言うのだ」という有名な岡田義夫氏訳で始まる「青春」は人生100年時代を迎えるこれからの世代に贈る最高のメッセージではないだろうか。「優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こう言う様相を青春と言うのだ」と続く。

人類が初めて手にする「人生100年時代」を前向きに捉え、一人ひとりがこの期間を「生涯青春」「生涯現役」として十分に謳歌することはできないか。そのためにはまず個々人が主体的に、プロアクティブにライフデザインすることが重要となる。

弊社、第一生命経済研究所は、団塊ジュニアを切り口に分析・執筆した「人生100年時代のライフデザイン　ライフデザイン白書2018年」を東洋経済新報社から10月中旬に発刊させていただく。個人にとどまらず、企業、公的セクターの皆様が「人生100年時代」をプロアクティブにデザインする指針としてご活用いただければ幸いである。